

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】 高尾 賢一郎

【所属】(助成決定時) 同志社大学大学院神学研究科博士後期課程

【研究題目】 現代シリアのイスラーム学者による「ユダヤ教」言及の際の典拠に関する調査

【研究の目的】

本研究の目的は現代シリアにおける「ユダヤ」に関する言及・説明の特徴の整理である。イスラームにとってユダヤ教は啓示を共有する宗教だが、現実にはユダヤ教徒が多数を占めるイスラエルと中東・アラブ地域を中心とする一部のムスリム諸国とが政治外交上の緊張関係にあることから、ムスリム諸国または一般のムスリムによる「ユダヤ」言及には激しい誹謗が見られることも多い。そのためイスラーム学者たちは「ユダヤ」言及の際、イスラームとの教義上の親和的關係に気を払いつつも国家の外交政策や一般大衆の民意を汲み取る必要に迫られてきた。伝統的なイスラーム学者を輩出し続けてきた歴史を持ちつつ、イスラエルとの緊張関係の最前線に立つシリアはその典型の一つである。それを受けて本研究では、伝統的なイスラーム学者を輩出し続けてきた歴史を持ち、イスラエルとの緊張関係の最前線に立つムスリム国家であるシリアを舞台として、同国における「ユダヤ教」言及を考察する。

【研究の内容・方法】

本研究の方法は一般的な「ユダヤ」書籍を整理し、続いて官製学者の「ユダヤ」言及として、1964-2004年の間シリアにおける公式なイスラーム宗教職として最高位とされる最高ムフティーを務めたイスラーム法学者アフマド・クフターローによる「ユダヤ」言及を参照するものである。一般的な「ユダヤ」書籍をその内容から分類する場合、最も単純な基準となるのはアラブあるいはシリアに確認されたかつてのユダヤ教徒を取り扱う歴史物、ユダヤ教について紹介する教学物という二つの別である。前者はトーラーやタルムードといった律法、ペサフやハヌカといった祝祭、パリサイ派やカライ派といった宗派に関するユダヤ教の基礎知識や歴史に関して紹介しつつ、ムスリム王朝下のユダヤ教徒の生活を綴るアラビア語史料を提示する。後者は多くの欧文献の使用が目立ち、近代西洋の思想研究や *Encyclopedia Judaica* 等の事績を参照し、ユダヤ「人」によるユダヤ定義／認識に着目する。その他、ユダヤ定義／認識を取りあげつつも性格が異なるものとして挙げられるのはクルアーンやハディースを引用しながら遡及的にユダヤ教徒批判を行なうものである。続いてイスラーム学者クフターローに関して、彼は世俗主義、アラブ民族主義を掲げるバアス党政権下で最高宗教職に任命され、現代シリア随一の官製学者と見なされる人物であるが、その一方でダマスカスにおけるキリスト教指導者との交流や孤児支援活動を積極的に進め、今日では宗教間対話や慈善事業に活動する社会指導者として評価される。その彼が公の場で「ユダヤ」に言及する機会はキリスト教と比べて少なく、その内容はシリア宗教界の顔役として隣国イスラエルを巡る問題に絡めた批判が多い。1996年6月にベイルートで行なわれた「エルサレムのためのムスリム・キリスト教徒間の会議」において彼は、エルサレムに対するムスリム、イスラエル、キリスト教徒の立場の差異に触れ、ムスリムとキリスト教徒との連帯によるイスラエル包囲こそがユダヤ教徒にとっての平和の道だと訴えた。

【結論・考察】

本研究は、現代シリアにおいて「ユダヤ」に言及される機会に関して、(1)アラブ地域あるいはシリア(ダマスカス)に確認されたかつての「ユダヤ教徒」、(2)宗教「ユダヤ教」について広く紹介する学的内容、また(3)「イスラエル国家」への批判、という典拠の区別を意識しつつ、その特徴の一端を整理した。アラブ、イスラームとユダヤ、イスラエルの関係、あるいはイスラームの「ユダヤ教」認識についてのこれまでの研究は、両宗教の親和的關係に着目する立場からは聖典解釈や宗教多元主義、敵対的關係に着目する立場からは国際政治の動向分析などを方法として、分業が進められることが多かった。その意味で本研究の独自性として挙げられるのは上記(2)に見られる近代西洋のユダヤ学の参照であり、イスラーム学者が参照したユダヤ教研究の資史料の特徴をユダヤ教プロパーの研究の知見から分析する点は、本研究が今後引き続き考察を深める必要のある学術価値を有すると考えられる。